

記録
16ミリ
カラー／25分

- 企画
雪印乳業株式会社
- 監修
日赤産院院長
小林 隆

スタッフ
■製作
村山英世
■脚本
藤原智子
瀬藤 祝
■演出
瀬藤 祝
■撮影
三枝弘夫
■イラスト
佃 公彦
■音楽
三木 稔
■解説
小沢昭一

文部省選定

妊娠、出産、育児に関する昔からの人間の知恵を語る民間習俗を、今日の妊婦の立場でとらえ、笑いの中に母性の尊さを説いた異色作である。今では見ることのできない貴重な習俗を各地に取材した。



今日でも、多くの人々が安産とよい子をと願って神社に参詣する。水天宮で安産祈願する妊婦のインタビューから、妊娠、出産には多分に精神的なものが伴うことが窺える。妊娠5ヵ月目に入る戌の日に腹帯をする習慣がある。腹帯は科学的にみても、お腹を支え、胎児の位置を正しく保つのに役立っている。お腹の胎児が男か女かということは、昔は殊に関心があり、岐阜県海津町では男女を占う「餅きり」の習俗が残っている。お餅の中に豆を1つ入れ、それを切って豆が切れれば女、切れなければ男というように、妊娠祝いのひとつとして楽しんだ。確率は5割である。新生児は女100対男105の割合で生まれてくるが、成長して大人になるのはほぼ同数という見事な自然の配慮がある。胎教については様々な戒めがあり、精神生活や食生活に注意を与えたものが多い。さらに妊娠が進むと昔の人は「子安講」に参加したり、妊婦を隣近所や親戚で呼んでご馳走する「オイダシ（オイダシゲ）」という風習もあった。

昔の人に比べると、現代の妊婦は母親学級や、定期健診等、医学的な恩恵に浴しているものの、孤独で不安になっている。福井県敦賀地方には「産小屋」の習俗があり、お産は不浄なもの、異常なものと考え、妊婦を家族から離して〈うぶや〉で産ませたが、そこには昔の人の生活の知恵も感じられる。妊婦を姑から離して村の女たちがお産を助けるというもので、このような産前習俗を見ていくと、現代のお産も、もう一度、人間性豊かなものとして考え直してみたいものである。